

◆グリーグ／「ペール・ギュント」第1組曲

ペール・ギュントは、ノルウェーの劇作家ヘンリック・イブセンによって1867年に書かれた詩劇である。ノルウェー民話を素材にしており、身勝手にほら吹きなペール・ギュントの放浪の旅と、彼を信じて待ち続ける女性ソルヴェイの純真を描いている。上演を意図して書かれた作品ではなかったが、舞台化に当たってグリーグに作曲が依頼された。グリーグが苦心して書き上げた甲斐あって、1876年の初演は大成功、特に音楽が好評を博した。しかしオーケストラの出来に満足しなかったグリーグは、その後何度か改訂を繰り返しており、また気に入った4曲ずつを抜き出して1888年に第1組曲、1892年に第2組曲（1893年改訂）を編曲している。今日では劇音楽として演奏されることはあまりなく、本日演奏するのもこの第1組曲である。

第1曲「朝の気分」（第4幕への前奏曲）

中年になったペールは、山師として財産を成し、地中海を旅していた。立ち寄ったモロッコの西海岸で、サハラ砂漠に昇る日の出を見る。非常に有名なフルートソロに始まり、転調を繰り返しながら次第に厚みを増してゆくオーケストラは、すがすがしい朝日を描写しているとともに、心機一転アフリカに降り立ったペールの心情をも表している。

第2曲「オーセの死」（第3幕）

恋人ソルヴェイを山小屋に待たせたまま放浪の旅に出たペールは、故郷で母オーセの臨終に立ち会う。オーセは最愛の息子と最期に再会できたことを喜び、ペールは優しいほら話で母の死への恐怖を和らげる。死別の悲しみの中にも幸福に満ちた、温かい心を表すような弦楽のみの合奏で演奏され、舞台ではそこに二人の会話が重なる。

第3曲「アニトラの踊り」（第4幕）

予言者になりすましたペールは、ベドウィン族の酋長の歓迎を受ける。踊りの中にいた酋長の娘アニトラは、色仕掛けの踊りでペールに迫る。（見事だまされたペールはその後砂漠の真ん中に無一文で捨てられる）

第4曲「山の魔王の宮殿にて」（第2幕）

魔王の娘に取り入り、魔の国ドヴレ王国を我が物にしようとするペール。宴の最中、最後の条件として魔王はペールの目を潰そうとし、ペールは命からがら逃げ出す。不気味なホルンのストップ音に続いて、低弦とファゴットが交互に魔王のテーマを奏でる。一曲を通じて常にクレッシェンドで演奏が進み、最後は絶叫のような強奏で終わる。舞台では魔王の手下のトルロ達の合唱が途中から加わり、最後の空白の間には怒号が飛び交う。

(Cb. K. W.)

◆ニールセン／フルート協奏曲

「分かる奴だけ、分かればいい」 某人気朝ドラで耳にしたセリフだが、ニールセンのこの曲もそういう曲だよなあ、と思う。

フルート協奏曲にも古今東西様々なレパートリーがある中、この曲は異色の存在だ。やや遅れて作曲された（フルート業界では）有名なイベールの協奏曲（1934年）がフランス近代の正統派だとすれば、ニールセンは田舎の変わり者。素朴でエネルギッシュで軽妙なユーモアにあふれているかと思えば、内省的で抽象的な一面もあり、親しみやすいのに気まぐれな、ヘンテコで不思議な魅力に満ちた曲。随所に感じられる何とも言えない清涼感は、北欧風味なのか、それともフルートという楽器がもたらす質感なのか。オーケストラは変則的な編成（フルートとトランペットなし、バストロンボーンあり）だが、これほど色彩豊かで、かつ各楽器にソリストティックな活躍の場が与えられている「オケ的にオイシイ」フルート協奏曲は他にないだろう。

デンマークを代表する作曲家、カール・ニールセンは、フィンランドのシベリウスと同年の1865年生まれ。6曲の交響曲は、4番「滅ぼし得ざるもの（不滅）」が最も知られているが、それぞれに独特の個性を持ち、とりわけ5番の深

みと6番の不可思議な軽さは、彼晩年の独自の境地を示すものとして大変興味深い。

コペンハーゲン管楽五重奏団のために作曲した「管楽五重奏曲」(1922年)が好評を博し、ニールセンはこの五重奏団のメンバーそれぞれのために協奏曲の作曲を構想。最初に完成したのが、フルート奏者のイエスペルセンに捧げられたこのフルート協奏曲(1926年、61歳の作品)である。〔これに続いてクラリネット協奏曲(1928年)が作曲されるが、残るオーボエ、ホルン、ファゴットのための協奏曲は作曲されないまま、ニールセンは1931年に没してしまう〕

曲は、2楽章から成っている。

第1楽章(Allegro moderato)は、オケの不協和音を伴う力強い導入の後、独奏フルートによる軽妙な第1主題と、穏やかな第2主題が対比をなす。途中、独奏フルートは、クラリネットとの長大な絡みや、ティンパニを伴ったトロンボーンとの対決など、不思議なシーンを次々と経験する(各楽器には、ソリストと対等に渡り合う技巧と度胸が要求される……)。ホ長調の広々とした田園的な経過句などを経て、カデンツァも前半はティンパニを伴った力強いもの、後半はクラリネットやファゴットと絡む幻想的なものとなっている。終結部は北欧の夕暮れを思わせる変ト長調で穏やかに締めくくられる。

第2楽章(Allegretto)は、弦楽器による意味不明な導入が収束したところで、独奏フルートによるト長調の軽快かつ素朴な主題が提示され、室内乐的に展開される。テンポを落とし、独奏フルートが真摯で内面的な主題を奏でる中間部(Adagio ma non troppo)の後、最初の主題による独奏ヴィオラとの掛け合いなどを経て、8分の6拍子の行進曲風な後半部分(Tempo di Marcia)に入る。ここでは、前半のAllegrettoの主題が変形して提示され、次第に技巧的になっていく。ホ長調に転じ、トロンボーンが酔っ払い風なグリッサンドを伴いながら絡み合い、突如狂乱する独奏フルートに乱入するティンパニという奇妙な場面も経つつ、曲は多幸感あふれる終結を迎える。

(Fl. T. T.)

◆チャイコフスキー／交響曲第5番ホ短調

クラシック作品の中でも最も人口に膾炙し、また頻繁に演奏されている交響曲の1つ。冒頭から主役のクラリネット奏者ではなく、第2楽章の美しいソロのあるホルン奏者でもなく、この曲を紹介するのに完全に役不足と思われるフルート奏者が書いてみるのも何か面白からうということで、初の曲目紹介を仰せつかった。ユニゾンが多くあまり目立たないこの曲を称し、「ユニ損大会」と称したフルート奏者がいるとかいないとか……しかし決して嫌いな曲ではない。高校生のとき、ムラヴィンスキー／レニングラード・フィルの爆演を、通学中にMDウォークマン(懐かしい!)の音量を最大にして、毎日のように聞いていたことを思い出す。

「第5番」と聞くと、ぱっと思いつくだけでベートーヴェンをはじめ、メンデルスゾーン、マーラー、シベリウス、ショスタコーヴィチなどが挙げられる。〔ちなみに、メンデルスゾーン(第6回)、シベリウス(第14回、第35回)、ベートーヴェン(第22回)、ヴォーン＝ウィリアムズ(第35回)の交響曲第5番は、過去にブルーメン・フィルの定期演奏会で演奏した〕

何かしら「運命」を想起させる第5番だが、チャイコフスキーの第5番はどのような曲なのだろうか。

第5番は後期三大交響曲の中で比較的標題的要素が少なく、古典的な均整のとれた美しい曲で、象徴的な意味を持った【運命の主題】により構成されている。

1887年夏～1888年春(47歳～48歳)に書かれたチャイコフスキーのメモ帳の中に、この作品の最初期のスケッチである、第1楽章の標題の草案が含まれている。「序奏：運命の前での完全な服従」「アレグロ：①不満、疑い、不平、非難、②信仰の抱擁に身を委ねるべきではないか?……もし実現できれば、素晴らしい表題だ」。また、他の楽章についても「“慰め”、“ひとすじの光明”、“いや、希望はない”」といった言葉や、第3楽章「ワルツ」の原案、ホ長調の主題スケッチ等が書き込まれており、この主題は【運命の主題】として用いられている。

1888年8月に完成し、11月に自身の指揮で初演されたとき、聴衆は喝采し舞台は花束で埋まったが、「思想がなく古めかしい」「3つのワルツを持つ交響曲」など、評価は厳しかった。

同年12月に、パトロンのフォン・メック夫人への手紙で、「サンクト・ペテルブルクで2回、プラハで1回演奏した結果、この曲が失敗作だという結論に達しました」と書き、「曲に“大げさな色彩”“拵え物のような不誠実さ”を感じ……（中略）、ああ、交響曲第4番と比べなんという違いでしょう！」と嘆いている。

1889年に彼がドイツ・ハンブルクで同曲を演奏した際、その練習で楽団員が同曲を大変褒め、演奏も大成功を収める。それにより彼は考えを改め、弟への手紙のなかで「この曲を再び好きになった」と書いた。

その後、大指揮者ニキシュが演奏し、ロンドン・ライプツィヒ・ベルリンで大好評を博し、彼の交響曲第5番は真に名作として世界に認められることになる。

第1楽章 Allegro – Allegro con anima, e-moll

クラリネットの暗く重い【運命の主題】から始まる。提示部では弦楽器により「まるでロシアの大地を雪を踏みしめながら歩く軍隊のような」行進曲の性格が与えられ、クラリネットとファゴットにより第1主題が奏される。弦楽器と木管楽器の呼応する第2主題群が接続され、舞い上がるような魅惑的なワルツでいったんクライマックスを迎え、展開部へと移る。

第1主題、第2主題のモチーフがいたるところに散りばめられ、転調して盛り上がり、カノン風のメロディーから、上昇するエネルギーと下降するエネルギーがぶつかり合うクライマックス。きしみながら次第に静かになり、和声的な緊張を持つ再現部を迎え、転調しコーダへ移る。

第2楽章 Andante cantabile, con alcuna licenza, D-dur

序奏部は弦楽器の低音域によるコラールで深く静かに始まる。ホルンが「広く深く広がる無限の広がりを持つ歌」(B.アサフィエフ)を奏し、クラリネットの対旋律が加わる。チェロがこの旋律を再び奏し、木管楽器のポリフォニックな対旋律に彩られる。移行部を経てクラリネットからファゴットに受け継がれるノスタルジックな旋律が、転調後オーボエにより再現され、オーケストラ全体に広がる。

そして金管楽器により【運命の主題】が力強く堂々と現れる。再現部では弦楽器群を中心に主題をオーケストラ全体で大きく歌い上げ、その後落ち着くかに見えるが、突然【運命の主題】が激しくその存在を主張する。コーダでは、主音の持続音上にモチーフがカノン風に繰り返され、美しいクラリネットのソロで静寂の中に曲を終える。

第3楽章 Valse: Allegro moderato, A-dur

スケルツォの代わりにバレエ音楽のような優雅なワルツの旋律が流れる。伴奏がワルツの拍節感を曖昧にしている。弦楽器のピツィカートが伴奏する中で、クラリネットとファゴットが旋律を奏で、木管楽器群により繰り返される。

軽やかな中間部はスケルツォの性格を持ち、16分音符のパッセージが各楽器へ受け継がれていく。この部分は4分の3拍子の中に4分の2拍子が組み合わさったポリリズムで、3拍目から始まるフレーズと共にとっても興味深い。再現部でワルツが再度奏され、コーダでは【運命の主題】が形を変えて現れる。ピアノシモで終わるかと思いきや、突然激しい和音が奏され、曲が終わる。

第4楽章 Finale: Andante maestoso – Allegro vivace (alla breve) – Moderato assai e molto maestoso – Presto, E-dur

【運命の主題】が長調で威厳に満ちた堂々とした性格で奏され、第4楽章が始まる。弦楽器から金管楽器、木管楽器へ旋律が移り、動きと音の厚さを増してクライマックスを作る。提示部ではロシアの精神的で野性的なリズムを持つ舞曲が提示され、第1主題がオーボエから弦楽器へと流れるように旋律を繰り返して盛り上げる。木管楽器でレガートに第2主題が奏され、クライマックスでは【運命の主題】が明るく堂々と鳴り渡る。激しさ、性急さを伴ってやがて壮大なクライマックスを迎え、ホ長調の属和音上で終止する。

コーダは3つの部分からなり、凱旋行進曲のように堂々と【運命の主題】が鳴り渡り、完全終止の後に急速な動きを見せ、壮大な頂点を迎えた後に第1主題群が奏され音楽は高揚。さらに第1楽章第1主題がトランペットとホルンで高らかに回帰し、和音の最強奏でエンディングとなる。

ブルーメン・フィルでは、チャイコフスキーの楽曲は、第 21 回定期演奏会で「くるみ割り人形」組曲を演奏したに留まっており、このメジャーな曲でどんな「ブルーメンらしさ」が発揮されるかという楽しみもある。練習中には「10代20代ではできない演奏にできれば」との団長の言葉もあったが、さて如何や!?

(Fl. M. M.)